



社長随想



No. 31



すこやかグループ

2022年5月25日（火）

【執筆】代表取締役社長 宮里敏行

発行：すこやかHD 広報担当 098-921-0090

社員の皆様お疲れ様です。

今回は、『^{ほうかしきえん}蜂窩織炎 闘病記?!』をお伝えします。

只今（5月10日）、私は^{ほうかしきえん}蜂窩織炎という右足に菌が入ってしまい、熱がでて**振寒（身体がふるえるだけのもの）**があり、足に潰瘍もでき大きく腫れてしまい中部徳洲会病院に入院しております。

（日頃の不摂生がたたったようです🍀）



5月9日高熱と足の腫れが発症し、どんな疾患か不安な状況で4月に開院されたうるま市の“さとう皮フ科”を受診しました。

薬の服用で様子を看ようとしたしましたが症状がどんどん悪化したため、翌日さとう皮フ科を再受診しました。

佐藤先生の診断により、中部病院で緊急処置、入院治療の手続きを開始しました。

●時間、痛みに耐えながら待合室で過ごしていましたがコロナ禍において病床の空きがなく、自ら中部徳洲会へ入院手配、その後も夜まで検査が続きました。

5月19日に退院するまで抗生剤の点滴を打つ日々、病院関係者、スタッフには大変お世話になりました。

コロナ禍でも検診や持病の治療、予防接種などの健康管理は重要です。

受診控えは健康上のリスクを高めてしまう可能性があります。

皆さんもどうぞ、自らの体を労わる時間を大切に過ごしてください。

入院中に5月15日の沖縄本土復帰50年を迎え、数々の復帰特別番組を見ることができました。

私が高校1年の5月15日に祖国復帰がありました。が、当時はただアメリカの施政権から日本の施政権に変わるんだ、ドルから円に変わるんだという深い思慮もなく過ごしていました。

しかし、3年生の先輩方の中には復帰のあり方に対する不満を述べ、青年活動家として声高に語っている方々もいました。もちろん県知事をはじめ、“核ぬき本土並み”というスローガンが達成できず、やるせない復帰を迎えた方々もいました。



初代沖縄県知事 屋良朝苗 氏

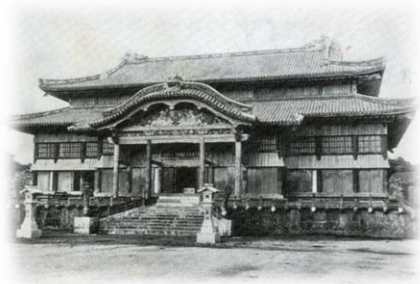
しかし一方で、アメリカの植民地政策から脱却して日本国憲法のもと、新しい沖縄県をつくるんだと大きく希望をもって行動を起こした多くの県民がいたことも事実です。これでパスポートがなくても本土へ行ける、物流が多くなり、橋や道路といった交通、社会インフラ整備が急ピッチで進んでゆくだろう。それによって経済が発展するのではないかと。

政治も経済も沖縄にとって大きなターニングポイントになりました。

沖縄は琉球王国という独立国家として大交易時代、中国、ベトナム、インドネシア等アジアの大海原をかけめぐり貿易を通じて活躍した時代がありました。

まさにボーダレスに国境を越えて行動していたのです。

その先人達の心意気、度量はたいしたものだと思います。



沖縄は戦後 77 年間、基地問題に揺れています。

0.6%の日本の国土の中に、70%の米軍基地があるのは不条理だと訴えてきましたが、解決の道筋はなかなか見えません。太平洋戦争敗北から日米安全保障条約が策定され、地理的要因とか国内外的植民地意識にあってその大きな役割が沖縄に重い荷物として背負わされているのです。

沖縄の願いは“全国民皆でその荷物を背負おうよ、分け合おうよ”ということです。私は過去を嘆いても悲観していても何も始まらないと思っています。

事実としてそこにあったのだから受け止めるしかない。

しかし、未来は私達の手でつくりあげることができます。

その為には歴史を学ぶことです。歩んできた道をたどり、歩む道をめざす。

世の中はボーダレスの時代です。

デジタル社会はもっともっと進むでしょう、国境なんてあってないようなものです。

一人一人が今ある人生に真剣に取り組み、大きな果実を得られることを期待いたします。



代表取締役社長 宮里 敏行